

---

# パニック・バトラー

光虎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パニツク・バトラー

### 【Nコード】

N6962E

### 【作者名】

光虎

### 【あらすじ】

どこにでもいる高校生明坂雷この少年を巻き込む大変な生活とは・  
・多くのキャラを中心としたドタバタ学園執事？コメディ！白夢  
「なんだ、このあらすじのやる気の無さは」雷「書くの面倒くさくなっただらる」白夢「それはひどい」

1 - 1 あれじゃね？笑顔の練習でもしてたら幸せになれるんじゃない？

数々の人が歩み、数々の車が交錯する都会の繁華街

仕事のように通る者も居れば、カップルに人気の場所でもある

そして、その中でたった一人学生服を着込みとぼとぼ歩いている少年が居た

「あー・・・たりい・・・」

少年の名は

「明坂雷だ。あけさからい・・・て、何で俺は自己紹介してんだ・・・？ まあ

いいか・・・面倒くせえ・・・」

雷はまるで放浪人かのように、何の目的も無く繁華街を歩き回っていた

そして、繁華街の外れに出る

「お、そろそろ時間だな。帰るか」

そして歩みを速めたその頃

「ちょ・・・お前達何をしているのだ！そんなことをしたらどうなつても知らんぞ・・・」

「ふひひ・・・そんな事言わずにさあ・・・俺たちと遊ぼうよお・・・」

「ふひひひひひ」

見ると、見るからに不良学生と思われる男三人に少女が一人囲まれている

「なんだあいつら・・・？ とりあえず・・・助けるか・・・？」

この少年、いつもは面倒くさそうにしているが人が困っている時は嫌々ながらも何故か助けようとしてしまうのである

すると、そこで少女が一言

「は・・・？何を言っているのだ、お前らと遊んでいる位ならラン

ロットに搭乗して黒の 土団に特攻した方がマシだ・・・」

辛辣な一言

「んだとてめえ！？女だからって容赦はしねえぞ・・・」

明らかに敗北フラグを立たせているありきたりな台詞を吐く不良

「おいおい・・・なんかやばくなってきたかぁ・・・？」

その状況を静かに見守る雷

「つちい！見ていても仕方がねえ！」

そして不良達の目の前に立ち

「おいてめえら！何男三人でたった一人の、それも女の子を囲んで  
いるんだ？ああん？」

「なんだてめえ・・・、関係者じゃないなら引っ込んで！」

「関係者がどうだろうと関係ねえだろ！俺はやりたいことをやるだ  
けだ」

「うるせえ！まるで彼女居ない暦〃年齢のような顔に言われる筋合  
いはねえ！」

「彼女・・・居ない暦・・・」

凶星である

この少年はそれほど顔は悪くないのだが何故か彼女は一人もできて  
いない

その事を少しコンプレックスにしているのだが・・・

「・・・ようしてめえら・・・、俺が裁きの鉄槌を下してやるから・

・・・」

顔は笑顔だが憤怒の感情を明らかにさらけ出している

そして雷は不良達に殴りかかる

「てめえらのその不憫なほどの鼻をへし折ってやらア！」

まず一人、顔面にストレートが直撃

「おい双！・・・てめえ・・・！！」

そして今度は不良達の方から殴りかかってくる

「おいおい二人でかよ・・・ま、関係ないがなあ！」

まず一人の首を脇に抱え込む

「離せ、離せえ！」

そしてもう一人の首をあいしている方の腕の脇に抱え込む

「なあお前ら……、見た感じ仲が良いからア……俺が同時にや  
つてやらア……！」

そして、二人の頭を鷲掴み

「おうら……よ、つとー！」

ガチンツッ！

二人の頭を激突させる

そして、倒れた不良の前に立ち

「ふん……二人目のドモ ” の名（自称）を持つ俺に敵うとで  
も思ったかあ！」

「つち……クソオ！お前ら逃げるぞ！」

そして不良達はそそくさと逃げ出していく

「ふう……で、その御嬢ちゃんはどうしたのかな……？」

少女の方に目を向ける

「早く帰れよ、親御さんが心配しちまうだろ……？」

そしてそこで少女が一言

「お前に御嬢ちゃんなどと呼ばれる筋合いはないし、彼女居ない暦

〓年齢のような顔に言われたくはないぞ……」

カチン

「……口が悪い女だな……」

「お前も相当だぞ」

「うるせえー！」

二人で言い合っていると、時間が刻々と過ぎていき……

「おおっと、こんな時間が、じゃあな！また不良に絡まれんなよ」

「その前にこれを持っていけ」

すると少女は綺麗なハンカチを雷に手渡す

「お、サンキュッ、……じゃあな」

そして走っていきながら自分の家に帰る雷

少女は雷の姿が見えなくなると、静かに呟く

「ふむ……あいつが適任かな……、見た感じちよつとした事情  
があるようだし……」

そして携帯電話を取り出し

「あートッシ・・・敏か？うん・・・そう・・・そっだ、そっして  
くれ・・・」

用件が済んだようなので携帯電話を閉じる

「ふふ・・・これで少しは楽しくなるな・・・」

1-2 ワオ！パニックだらけの生活記 くポロリは脳内補完でく

「あーあ・・・たりの・・・」  
家に帰り着いた雷。

いつものように何もすることも無く、だらだらーっとくつろいでいる。

ゲームもしなければテレビも見ない。

やることといえば風呂と飯だけのようなものである。

「はあ・・・いつからこんな生活になっただっけなー・・・」

そして時間は刻々と過ぎてゆく

「ん？あー、こんな時間か・・・そろそろ寝るか・・・ふああ・・・」

布団を出し、眠りにつく。

「そっぴや今日助けたあの女なんだっただ・・・？・・・ただの女子高生かな・・・」

「・・・まあいいや、別にどうってこともねえし・・・」  
欠伸をしながら今日の疲れを癒そうとする。

翌朝

「今日も良く寝た・・・っ」と  
いつものように目を覚ます。

「今日は何しようか・・・」  
と、咳いているとあることに気がついた。

「えーっつと・・・ここは・・・どこだ？」

キラキラと輝くシャンデリア、ふかふかのベット、どこの誰がつくったかも分からないような肖像画、そして真ッ広い部屋。

明らかに雷の部屋ではないし、知っている場所でもない。

「うん・・・こりゃきつとあれだ、夢。ドリーム、イッツアドリー

ムだ・・・」

と、この状況を夢だと判断する雷。

「こんなことあるはずがない……。まああつてほしいといえども  
ちやくちやほしいわけだが・・・」

そこまで喋っている和不意に扉が開く。

「あ、入っていいツスよー」

完全に夢だと思っっている雷は来客を容易に受け入れている。

しかし、そこに居る人物が目に入ると瞬時にその心情を変える

「・・・ツ!？」

「やーやー、昨日の筋肉馬鹿ではないか。おはよう」

なんとそこにいたのは

「お前・・・昨日の・・・」

昨日不良三人から助けた少女である。

「おー！覚えてくれてたんだねー！わたしーさびしかったー」

「喋り方変えんな気色悪い！」

「少しは動揺してもいいではないか・・・」

「ところでこりやあなんだ!?なんか幸せそーな夢なんだが」

雷は少女にこれが夢であるということを確認する。

「夢？何を言ってるんだお前は、これは現実だぞ。ノンフィクショ

ン、この物語は実在の人物、団体と著しく関係があります、だぞ。

・・・このフレーズいいな！」

少女は自分で考えたフレーズを褒め称えている。

「夢じゃない?・・・これはまたリアルな夢だな・・・」

雷はまだこの状況を夢だと思っっている。

「・・・まーだ夢だと思っっているのか。仕方がない、ちょっとこっ  
ちへこい」

「お、おう・・・」

少女は雷を自分の元へと呼びかける。

そして雷が自分のところに来た瞬間

「それえ」



少女は指をパチンと鳴らす。

「何をしてr・・・ツツツツツ!?」

すると雷の頭の上から金盞が落ちてくる。

雷は痛そうに頭を抱える。

「ハツハハハハ！面白いなーお前」

「笑い事じゃねえ！本ツツ当に痛いんだからな！」

「すまないすまない・・・。だけどこれで分かっただろ？」

「何が」

「これが夢じゃないってことだ」

「あ」

痛みと共にこの状況を把握する雷。

そう、これは夢ではないのだ。

「ノンフィクション！ヤファー！」

少女は嬉しそうに笑い転げながらそう叫ぶ。

「つつーことはなんだ!?この家はためーの家ってことか!??」

「お、勘がいいねーボクー?あとで飴ちゃんあげよう」

「子供扱いするんじゃないねえ！」

「ちよつとはノリツツコミぐらいしてくれ」

少女は呆れながらそう言う。

「うつせえ！こちら聞きたいことは山ほどあんだよ！ここはどい」

だお前はなんだという経緯でこうなったここはどこだ!??」

「ここはどこだって二回言ったな」

「うつせえ！」

少女は笑っているが雷は本気である。

「まあまあ、一つ一つゆっくり教えてやる」

「おう」

「まずここはどこだ、だな？」

「そ、そうだ」

「まずこここの地域は霊陽区、お前も知っているだろ？」

「・・・あー、俺が住んでる明戒区の横か」

「そつだ、そしてその南側にあるのが、」  
少女は床を指で指しながら言う。  
「お屋敷かなんかか・・・？」  
「普通の人間なら日本でお屋敷なんて言葉簡単に使えそうに無いのによく出たな」  
「うるせえ」  
「まあ・・・お屋敷みたいなもんだな、そこところは後で説明しとく」  
「そして私のことだな」  
すると少女は手の平を胸に当てて  
「私は白夢、岩崎<sup>イワサキハクム</sup>白夢だ。岩崎家次々期当主・・・とでも言おうかな」  
「と、当主う！？」  
「お屋敷という言葉は出たのに当主という言葉が出ると過剰反応するんだなお前」  
「そんなことはいい！」  
「お前、『うるせえ』以外の言葉も出るんだな」  
「うるせえ！」  
白夢はクスリと笑う。  
「・・・そして最後の質問・・・、どついつ経緯か。だな？」  
「お、おう・・・」  
「お前は昨日、私を助けたらろう？」  
「ああ」  
「そして、お前が適任だと思つたんだ」  
「何の？」  
「私の近衛執事に。だ」

そして

この少年を巻き込む大変な生活が始まる・・・

「はい、OPいれてー!」

「そんなんねえよ!」

1-2 ワオ！パニックだらけの生活記 くボロリは脳内補完でく（後書き）

・・・はい。どうも初めまして、光虎と申します。

ここまで読んでどうでしたでしょうか？

「面白くねえw」の方や「そんなことより野球しようぜ！」の方や

「どうでしたでしょうかって日本語おかしくね」の方も色々居ると思います。

さてこの作品、これからも続けていくつもりですが

作者はゆとり学生で部活やってるくせに非リアな青春少年です。

そのため執筆速度は遅いです、通常の三分の一もありません。

そんな駄目人間でよければ読んでやってください。

大丈夫です、この小説を執筆する方法は108あります。嘘です。

実はそんなにないです。

「なんだこのノリwww」って思った方がいてくれると嬉しい限りです。

では、出来る限りお楽しみください・・・

### 1 - 3 先輩って呼ばれると妙に嬉しくなるよね

「すまん、もう一度言ってくれ」

「ああっ！まだOP終わってないだろう！」

「だからそんななんねえっつーの！」

「分かった分かった・・・で、何を復唱してほしいんだ？」

雷は溜息をつきながら問う。

「俺が・・・なんだって？」

「近衛執事」

「そう・・・それ、近衛執事だ」

「それがどうかしたのか？」

白夢はさも同然のような顔つきで答える。

「なんだそりゃ・・・？」

「知らないのか？・・・まー無理もないか」

白夢は近くの椅子に腰掛ける。

「説明してもらいたいのか？」

「もちろんだ」

「んーそうだなあ・・・簡単に言うと、『主に仕え絶対永久を誓い、

主の友人関係を持つ執事』みたいな感じだろうか」

「・・・よく分からん」

「つまり私が死ぬまで仕える執事・・・かな」

「友人関係つてのは？」

「まあ要約すると、私の暇潰し相手といったところか」

「・・・とりあえずは分かった」

「ほう？」

「でも俺がそんな執事になると思うか？普通の人間なら絶対に思えないぞ？」

雷は続けて言う。

「だってそうだろ？得体も知れねえ女に死ぬまで仕えるなんて常人

「じゃはいそうですね、って言うわけないだろう?」

「ああ、そうだな」

「じゃあなんで・・・」

「お前が常人ではないと判断したからだ」

「はあ!？」

雷は驚いた声をあげる。

「その175cmはある身長、私を助けた時の戦い方、そして・・・」

「そして・・・?」

「平日の下校時間に荷物も持たずまるで二トのように街をぶらつくその行動、明らかに何かしらの事情があると見た!」

「うるせえよ!」

「・・・まあそれなりの事情はあるんだろう?」

「まあ・・・な」

「何かあったのか?」

「・・・」

雷は口ごもる。話したくないと言う意思表示も含めて。

白夢も雷が話したくないということに気づく。

「・・・話したくないのなら余計な詮索はしない」

「・・・どーも」

「本題に戻すぞ?」

「分かった」

「もう一度聞く、お前は私の近衛執事をやってくれるか?」

「・・・」

雷は頭を押さえ考え込む。

「こんな女に仕えていいのか・・・?仕えてどうなるっつーんだよ・・・?」

「はい仕えました、さー問題です。俺はどう変わった?」

「・・・へ?ちよっと待てよ?」

雷は少女の言葉を思い出す。

『主に絶対永久を誓い』

そう・・・これだ、これだよ！

つまりこれは、『近衛執事の一生を保障する』ってことじゃねえのか？

・・・面白え・・・

退屈していた日々が無くなりそうだぜ・・・。

「・・・分かった！その話乗ったぜ！」

「・・・へ？」

「え・・・？」

白夢がきよとんとした顔になっている。

「まさか本当に仕えてくれるとは・・・ますます気に入ったぞ！」

「ちよつと待てやア！なんだ？仕えてくれるとは思っていなかったのか？」

「当然だろう。こんな話に乗るやつは馬鹿しかいない」

「てんめエエエエ！」

「ハツハツハハ！私も退屈している日々が無くなりそうだ！」

「コノヤロオオオ！絶対に死んだ顔を拝んでやる！絶対にイ！」

「ハハハハハハ！」

「笑うなあ！」

そしてこの少年の大変な生活が始まる・・・

「で・・・具体的にどんな仕事をすればいいんだ？」

言い合いを終えた二人は仕事の話に入る。

「んー・・・そうだなあ・・・」

白夢はどこからか本を取り出し

「まずは屋敷内の廊下掃除、備品の整理に朝食調理の手伝い、各部屋の掃除、・・・まあ家事的なことをする」

「・・・常人じゃクリアできない仕事だろこれ・・・」

「まあそうだな、そして空いた時間は私の暇潰し相手、これが休日

の予定かな」

「あれ？平日はどうなるんだ？」

「早朝の予定を済ませたら登校だぞ？」

「と、登校!？」

「ああ、そうだが」

「お、俺も学校に行けるのか!？」

「もちろんだ、既に入学手続きは済ませてある」

「本当かよ!？」

「ああ、マジだ」

「くー!嬉しいぜエ！」

雷は体全体で歓喜する。

「変な奴だな」

「変な奴で結構だ！」

「フフツ・・・そうか」

「よし!まずは屋敷内の掃除だな!任せとけ！」

雷はすぐに部屋を飛び出そうとする。

「あー待て待て、お前やり方も知らないでできるのか」

「あ、そうだった・・・」

「ちよつとした助っ人を呼んでくる、ちよつと待ってる」

白夢は携帯電話を取り出す。

「あートツシー?新しく入った近衛執事の助っ人をしてやってくれ・

・・・うん、頼んだ」

白夢は携帯電話を閉じる。

と同時に部屋の扉が開く。

「お嬢様あ、お呼びですかー？」

見ると燕尾服を着た青年が一人、立っていた。

「おートツシー!速かったなー」

「そのトツシーというのをやめてくださいといつも言っているでし

ようつ?」

「すまんすまん・・・癖なのだ」



「今後気をつけてくださいよ．．．つと、そして新人というのはどちらですか？」

「そこに立っているではないか」

白夢は雷を指差す。

「あー．．．あまりにもデカイから備品かと思いましたよ．．．」

「．．．デカイは余計だ．．．」

「こいつの名前は．．．あれ？なんだっけ？」

「明坂雷だ！入学手続きしたんなら覚えてる！」

「あーそうそう雷ぴんだ雷ぴん」

「その呼び方やめろ！」

「ふむ．．．元気な奴ですね」

「だろっ？」

「ええ」

「二人だけで話を進めるなー！」

「威勢がいいというべきでしょうか．．．」

「ハツハツハ！とりえず自己紹介をやってくれ」

「承知しました」

トツシーと呼ばれた青年は胸を張り、

「オレの名前は凜坂敏<sup>リンザカトシ</sup>だ、白夢お嬢様の執事をしている。今後とも

よろしくな、呼び方は先輩と呼んでくれ」

「トツシーは近衛執事じゃなくて普通の執事だ、まあそれでもお前の上司ということには変わりはない。当分の間トツシーのパートナーという感じになってくれ」

「あれ？そーいや俺はお前に敬語じゃなくていいのか？」

雷は白夢を見ながら言う。

「ああ、別に構わない。友達みたいなものだからタメ口でも全然構わない、むしろそうしてほしいくらいだ」

「へえ．．．」

「あ、でも年功序列は大切にしてくれ。トツシーとは敬語で喋るんだぞ？」

「わ、分かった」

「じゃ、私は二度寝するから。トッシー、後は頼んだぞ」  
「分かりました」

「雷も修学旅行みたいにはしゃぐなよ？」

「早く寝ろよ！」

「分かった分かった・・・お休みい」

「良い眠りを」

そして白夢は自分の部屋に向かった。

「ふう・・・では雷・・・といったか？一緒に行くのか」

「は、はい！」

「いい声だ、オレも気に入った」

「ありがとうございますッス！」

「ようし、んじゃ廊下の掃除をするぞ？」

「はい！」

敏と雷は廊下へと向かっていった・・・

「まずはおおまかに箒でゴミをとる、その後はモップなんか使っ  
て念入りにやってくれ」

「分かったッス！」

「オレの他にも執事やメイドも居る、分からなくなったらそいつら  
に聞いてくれ」

敏は笑顔でそう言う。

「ところで俺のほかには近衛執事はいるんですか？」

「いんや、お前一人だ」

「へえ・・・なんでっすか？」

「近衛執事はいこの間くらいにどこかの金持ちが提案してな、そ  
れがここに伝わってきて白夢お嬢様とその父上が大変興味をお持ち  
になった。そして近衛執事としてお前を雇ったわけだ」

「なるほど・・・」

「それに近衛執事が何人も居てみる、それこそお嬢様が大変になる。一人がちょうどいいんだ」

「ふうん・・・ありがとうございます」

「分かったらさっさと仕事につけ」

「はいッ！」

20XX年、新しい近衛執事の初めの仕事が始まるうとしていた・・・

## 1 - 4 時間は短し走れよ執事

黙々、かつ着実に仕事を進めていく雷。

「へえー・・・よくできるもんだなア・・・」

その姿を見て感心したような顔をする敏

「ええまあ・・・、清掃のバイトやってましたしねえ・・・」

モツプがけを行いながら敏に答える。

「バイト？業者さんに許されたのか？」

敏は疑問を投げる。

「まあこのガタイですし。大人に見られたようっすよーハハハハ」

雷はさも当然のようにその疑問に答え、笑う。

そんな雷を見て敏は思う、

(た、大変な生活だったんだろうな・・・)

「ほら先輩、仕事を始めてくださいよ」

「ああ、うん・・・」

指摘された敏は自分の仕事に戻る。

「いつやー・・・にしてもただっ広い廊下だな・・・」

そう思つのもそのはず、屋敷(?)の大きさに比例して廊下も大

きくなり、軽く6Mは超えている。

「それがこんなに長いんだぜエ？もう考えただけで疲れるわ・・・」

モツプに顎を乗せて少し休憩する。

しかし、そんなところで一つ声が聞こえた。

「ほらほらそのサボリ。サボってないで早く仕事しようか！」

その声が聞こえた方向に雷は目を向ける。

「え、あー・・・スイマセン。でえつとー・・・どちらさんですか

？」

見るとメイド服を着込んだ少し小柄な、それでも雷よりかは年上と見られる女性が立っていた。

「私？私は礼沢<sup>レイサワ</sup>魅衣奈。格好見れば分かるけどメイドだよっ」

魅衣奈と名乗った女性は元気よく答えた。

「ほらほら分かったらしつかり仕事に戻ろう。戻らないとお姉さんが痛い目に会わせるよー？」

「へ？でも・・・」

「ん？」

「俺のこの服、見ても何か疑問に思わないんですか？」

現在雷はまだ執事服を貰ってはず、学生服を着ている。

この屋敷（？）内で学生服を着ている少年が黙々と掃除をしているなどというシチュエーションはありえないだろう。

「あ、確かにおかしい！すると・・・不審者？」

魅衣菜はとんでもない単語を発する。

「いやっ違っ・・・」

「不審者だ！ここに不審者があー！」

「誤解されるようなこと言わないでくださいイ！」

雷に叫ばれ不審者だと騒ぐのをやめる。

「じゃあ・・・」

魅衣奈はこめかみを押さえて考え込む。

「ええつとじゃあ・・・あ、今日入ったっていう新入りの近衛執事かな？」

「そうです」

「あーなるほどねえー、道理で執事服をもらってないわけかー」

「はい」

「あはは、ごつめんねー。不審者扱いしちゃって」

「い、いえいえ・・・」

雷はこう答えるも額には汗を垂らしている。

「それじゃっ仕事に戻ろうかつ。またサボってたらお姉さんが痛い目に会わせてあげるよー？」

「き、気をつけてきます」

この人の痛い目は底が知れないだろうと勘付いた雷はセオリー通りの行動に移る。

「うし、次は備品の整理か」  
第一ミツシヨン廊下掃除を終えた雷は次のミツシヨン備品整理へと移る。

しかしこの岩崎家、廊下もそうだったように備品の量も半端ではない。

肖像画から手の込んだ机、古めかしい銀食器やなにやらよく分からない分厚い書物などなど様々な備品が置かれている。

「んゝ・・・これはまた大変な作業になりそうだ」

備品の整理といっても別にその物をどこが正しいに移動させるだけではなく、何か欠落している部分があるのか見回することも含まれている。

そのため、量が多い上大変な作業になるというわけである。故にこの備品整理ですら複数多数の執事や業者で行うようにしている。

「おー雷、ちよつとこつちへ来てくれー」

敏が雷を呼ぶ。なにやら重たい机を運ぶようだ。

「これは見るからに重たそうっすね・・・」

「ああ、とりあえずそつちを持ち上げてくれ」

「はい、分かりました・・・んっ！」

雷は敏が指差したところを持ち上げ、運んでゆく。

敏が道先案内をしながら運んでいき、雷がそれにしたがって運んでいく。

「ようし。ここまでだ、ゆっくり降ろしてくれー」

「はい」

降ろしたところで雷は敏に問いかける。

「そっぴや俺の執事服はどうなるんですか？いつ届きますか？」

「んーそうさなあ・・・、オレが考えるとー・・・明日には届くんじゃないのか？」

「早いつすね」

「まーな、岩崎家が持っている工場の一部を使わせて頂いて、そこ

で執事服を作っているからな。他にも通常の衣類とか生活用品とかはその工場で作っている」

「へー……」

「工場員の中にはバイトや雇われの方もいるが、正規の工場員もいらっしやる。執事服とかを使う時は感謝しながら使うんだぞ」

「心に決めときます」

「ちなみに正規の工場員の方には岩崎家と仲の良い……正式には白夢お嬢様と仲の良い方もいらっしやる。時々この屋敷にも出入りする」

「なんかあいつって顔が広いんですか？」

「んまーそうだな。白夢お嬢様はお心が広い方であるから」

「そんなもんっすかね」

「そんなもんだよ。さ、仕事に戻るぞー」

「へーい」

「ふー、ようやく片付いたかなあ」

第二ミツシヨンクリア。そして次の仕事に取り掛かろうとする。

「ようし。では休憩に入りませーす」

だがそこで敏が休憩の合図を出す。

「ん、休憩か。……あれ？俺何すればいいんだろ？」

休憩時に何をすればいいのか、それを考える雷。

と、そこで肩にぽんつと手が置かれる。

振り向くと、雷の肩に手を置いている敏と、その横に立っている

魅衣奈がいた。

「今日はオレの同僚の魅衣奈とオレがお前の世話をすることになっている。でもまあ今日に限ったことじゃない、というか毎日だな」

「はろーん また会ったねー」

「なんだ知り合いなのか」

「いえ、掃除の時に会っただけです」

「そーそー、じゃあ二人とも行こっか」

「「ういーっす」」

二人が声を合わせる。

「・・・ってどこにですか？」

雷が問いかける。

「そうだな、まずはこの屋敷の外に出てみるか？」

「外ですか、分かりました」

屋敷の廊下を歩きながら外へ出る三人。

一歩外へ踏み出すと意外な光景が見えた。

「えっと・・・これはどういうドッキリで？」

「何がドッキリだ、これが屋敷の外だぞ」

「そーだよー」

「いやいやいやいや・・・なんであの屋敷の外が・・・」

雷は少し息を吸い込み、

「なんで屋敷の外に神社があるんですかアアアアア!?」

雷は一番の疑問を声に出す。

それもそのはず、屋敷を外に出てすぐに所に普通の神社とは比べ物にならないくらいに神社が建っているのだ。

「そりゃここが神社だからだろ」

「そーそー」

「ちよつと待ってくださいいっ？あのシャンデリアやらベッドがある屋敷の外に何で神社なんですか!？」

「いや普通だろ」

「普通だよっ」

「違うでしょう!？ここは日本でしよう? イッツアジャパン! その日本の神社をもつ屋敷がなんでシャンデリアなんかがあるんですか!？」

「そりゃあお前え・・・」

「これが普通なんだよー、お金持ちの神主さんは屋敷と神社は別っ



ていうことなの」

「え？じゃあひょっとすると白夢は……」

「そ、この神社の巫女さん」

「ええええええええ！？」

「元々岩崎家は伝統ある神教の家系で、そして副業として色んなところの手を着け始めたんだ。んで多くの財産が手に入り、屋敷を建てたわけだ」

「これも結構昔の話なんだよー、どれくらい前だったかなー」

「覚えてるか？」

「ううん、敏は？」

「オレも覚えてねえ」

「二人の世界に入らないでくださいッ！と、ともかく……ここは神社なんですね？」

「さつきから」

「そういつてるじゃーん」

「そ、そうっすか……」

「分かれば」

「いいんだよっ」

「おっとそろそろ時間だな……戻るか」

「はい」

「はい」

休憩が終わり、第三ミッション朝食の手伝いに入ろうとしていた・・・

「さっきからミッションミッションつるさいんですけど!？」

「気にしたら」

「負けだよ」

## 1 - 5 爆弾男は喧嘩の元によくなくなるから注意しよう

休憩を終え、朝食の準備に取り掛かるため厨房に行く三人。  
他のメイドや執事達もそれぞれの仕事にかかるようだ。

「もう既にコックが朝食をつくっている。オレ達は配膳なんかをするだけだ」

敏が初めての仕事を行う雷のために説明している。

「今日は白夢お嬢様だけの御朝食だ、オレ達三人のみでミッションを遂行する」

「先輩もミッションミッション感染されないでくださいい！」

「そつするミッション」

「語尾をミッションにしないでください！」

「二人とも漫才面白いよー」

「漫才じゃないですウウ！」

「ですか？なんだそれすいせいせk」

「言わせません！」

「で、だ。とりあえずそつちのサラダを持っていってくれ」

雷が敏のふざけを止め、しっかり仕事に入る。

「はいっす」

「魅衣奈はそつちのデザート持ってってくれー」

「いえっさー」

敏は魅衣奈達に指示を与えるとコックのもとへとゆく。

「今日の白夢お嬢様は何卒ご機嫌がよろしい。このご機嫌を害さないよう注意をお願いします」

「ええ、分かりましたよ凜坂さん」

「では」

そして敏は自分の配膳の仕事へと移っていきこうとした。

「ふーん、普通に仕事は真面目なんっすね」

雷は意外だなというような顔で敏にそう言う。

「まーな。というかなんだその意外だなあこの糞執事がというよう  
な顔は」

「最後の方いりませんって！」

「・・・まあオレだって金を貰っているものだ、真面目にやらない  
でどうする」

「そっつすね・・・」

雷は少し疑問そうに考える

俺の仕事ってこんな感じでいいのかな？

「お前は近衛執事だ、近衛執事らしい仕事をすればいい」  
まるで雷の心を見透かしたように答える敏。

「は、はいっす！」

「よし、いい声だ。そろそろ行くぞー、白夢お嬢様が来られる頃だ」

「ふああ・・・良く寝た。やはり日曜日はよいものだな」

二度寝から覚めた白夢は既に食事をする場に来ている。

「お嬢様、ご朝食をお持ちにありがとうございました」

敏が前菜その他を配膳しに来る。

「今日の紅茶はアップルティーだそうだ、しっかり飲めよ」  
雷もそれに続き紅茶を配膳する。

「ほー、さまになってるじゃないか雷ぽん」

「へんな呼び方やめろって」

と、そこで

「はっくむー サラダだよーっと」

魅衣奈が白夢を呼び捨てで呼ぶ。

「へ？先輩い？魅衣奈さんは白夢のこと呼び捨てでいいんですか？」  
雷はまず一番に思った疑問を敏に問いかける。

「ああ、魅衣奈は白夢お嬢様の昔からの知り合いであり専属第一メ  
イドだ。敬称敬語で喋らなくてもよいと白夢お嬢様から許可が降り  
たため呼び捨てでも構わないことになっている」

「そ、そうなんすか」

「でもちゃんとした仕事の中では敬語を使わなければならない。今  
日みたいに親御様が居ない時などはこのように喋ってもいいわけだ」  
「ふうん・・・」

「ちなみに専属第一メイドというのは近衛執事と同期に生まれた極  
最近のものだ。ま、専属第一メイドは日本では魅衣奈くらいしかい  
ないらしいが。んで魅衣奈は普通のメイドから専属第一メイドへと  
転職したわけだ」

「大体は分かりました」

「白夢お嬢様も昔からの親友である魅衣奈とはかしまった喋り方  
はしたくなかったとおっしゃられていた。魅衣奈も同様にな」

敏がちよつとした解説を終えると

「お、魅衣奈姉さんありがとう」

と、白夢が調子よく喋る

「ね、姉さん!？」

「魅衣奈は白夢お嬢様から姉さんと慕われていてな、どういう経緯  
かは知らないが」

「なんか二人ともいいコンビっすね」

「そう思うだろ？俺もだ」

「今日は白夢の嫌いなトマトが入ってるからねーっ、しっかり食べ  
るんだよー？」

「っうえ!？トマト・・・?」

白夢がげんなりした表情になる。

「んだよお前トマト嫌いなのか?」

雷が問いかける。

「雷ー、お前近衛執事ならトマト食ってくれ」

白夢はトマトをフォークで刺し、雷のほうへ差し出す。

「駄目だ、てめーが食え」

「うう・・・雷の甲斐性なし・・・」

「うつせー、黙ってる」

そんな二人の会話を聞きながら

「いっやー、雷君もすっかり仕事に馴染んじやってるねー」

「あいつ近衛執事の才能でもあんのか」

「そうなんじゃないー？」

敏たちは話している。

「おら食え食えー」

「いーやーだっ！」

「ふー・・・とりあえず午前の仕事は終了っつと」

朝食を終えて自分の部屋で一休みする雷。

「そっぴやさつき先輩からスケジュール渡されたんだっけ」

雷は朝食を終えての敏との会話を思い出す。

「とりあえず午前の仕事は終了だ。俺達は執事としての仕事に戻るから、お前は白夢お嬢様の護衛、後はお暇を潰してあげてくれ」

『し、護衛!?!』

『ああ、岩崎家は日本有数の由緒正しき家系でいらっしやる。それ故誘拐なんかもありえるわけだ』

『な、なんか大変そうっすね...』

『お前が仕事に慣れてきたら俺が直々に稽古をつけてやる。楽しみにしとけよーっ』



「この頃のやつは面白いからな、特に5は」  
「そーいうもんか」  
「そーいうもんだ。さ、始めるぞ」  
白夢はSFCの電源を入れる。  
そしてステージは一番の「ふつう」に決定する。  
「私のプレイをなめるなよ・・・！」  
「わかったわかった」

「む・・・」

しばらくの間ゲームを満喫していた二人。  
しかし戦況は白夢の劣勢、雷はこの手のゲームには慣れているよ  
うだ。

「お前、また自滅してるぞ」  
ブロックと自分の向こう側に爆弾を置いてしまい逃げられなくな  
った白夢。

「よ、よくあることなのだ！これくらいこれくらい・・・」  
「っってお前さつきから連続だけどな」  
「これからが私の本領発揮だ！」  
「やってみるよ」  
「あ、また自滅・・・」  
「・・・天性？」  
「うるさい！」

しばらくの間ゲームを楽しむ二人。

「ん、もうこんな時間か。そろそろゲームをやめようではないか、  
中々楽しかったぞ」

白夢が電源を切る。



「んだ？なんか用事でもあんのか？」

「うん、少し知り合いのところへな。お前もついてきてくれ」

「ま、それが仕事だしな」

「つとと、その前に・・・」

白夢は自分の机の引き出しを引き、紐状のリボンを取り出す。

「私の髪を縛っておいてくれ」

白夢は取り出したリボンを雷に差し出す。

「なんで俺が!？」

「他人にやってもらおう方が綺麗にできるからだ！」

「わかったよもう・・・」

雷は渋々リボンを手取る。

「で、どういう縛り方をするんだア？」

「一縛りをお願いします。簡単に言えばポニーテールだな」

「ふうん・・・その長つたるい髪どうするかと思えばポニーテールか」

「うむ、姉さんが教えてくれたのだ」

「へえ・・・」

雷は感嘆の声を漏らしつつ白夢の髪を縛っていく。

「これほどでどうですか、お客さん」

「おー！綺麗にできたではないかー！」

雷は髪を縛り終え、白夢はその出来ばえに喜んでいる。

「うむ、では外へ行くか」

「おう」

PM14時、近衛執事とその主人は一度屋敷を出てゆく。

ep1・5 トツシーとミーナの岩崎家ラジオ通信

「ミーナとー！」

「・・・トツシーと」

「岩崎家ラジオ通信」

「えーっと、このラジオはこの作品に関する質問や敏への質問などに答えてたり、その他いろんなことをするラジオでーす！」

「んまあ実際作者が勝手に考えた質問がほとんど」

「敏い それ以上言つとここから出て行つてもらうよー」

「・・・気をつけておく」

「では記念すべき第一番の質問！PN・【カロリーオフってカロリー本がないの？】さんからの質問でーす」

「PNからして質問する気満々だな」

「そんなことは置いといてっ！えーっと・・・」

『敏さん何か特技などあるんですか？あとケータイのアラームで起きられないのは何故ですか？』

「最後はどうでもいい質問だな」

「いいから答えようよ」

「オレの特技か、これといつて特技はないがトランプタワーを10秒で三階作れることだな。この特技のおかげで白夢お嬢様をよく喜ばせたものだ。何か可哀想な人を見る目をしていたが。ケータイのアラームで起きられない時はマジンーとかゲッーのOPでもアラーム音に設定しておけ。ちなみにオレは9シリーズの中から適当に選んで設定してある。今ではサスライーだ」

「これは納得しろともいうようなお答えでしたね」

「他にも特技はあるぞ。ケータイの閉じる音をカッコよくするやつとか他には」

「以上！カロリーオフさんからのご質問でした！」

「言いかけていたというのに。あとお前、勝手に略すなよ」

「細かいことを気にしないっ」

「人の名前って大事なんだぞ？お前いつたいどれだけの人間が名前をつけることに悩んでいたか」

「おっと！もう時間です。いやー時が経つのは早いですねー」

「おい、人の話を」

「では、また次回！」

## 2・1 そりゃモニター上や画面上に映ってたりするドジは可愛いけれども

雷と白夢は屋敷の外へ出て、白夢の知り合いの元へとゆく。

「おい。どこ行くんだよ」

まず最初に思いついた疑問が白夢に投げかけられる。

「ふふ、見てからのお楽しみというやつだ」

クスリと笑いながら白夢は答えた。

「・・・で、後どんくらいなんだ」

「そつだな、大体・・・あ、着いた」

そのボケに対してズシャーっと雷が滑る。

「お前漫画みたいなさべり方するんだな」

「うるせえな！ って・・・んだここ・・・？」

雷は白夢が指し示した物件を見る。

「桜葉・・・書店・・・？」

「そつだ、まずは入って確かめろ」

カランコロン

白夢が書店の扉を開ける。

すると、中の少年が元気よく

「いらっしやいませー！」

と答えた。

「つとと、白夢嬢様じゃないですか！ また本を買いに来たんですか？」

少年は白夢に問いかける。

「ああ、今日はラノベでも買いにこようかなと」

「それでしたらこちらに新刊がありますよっ」

少年が本が積まれている場所を示す。

「そうか、ありがとうな」

「いえいえ！ ってそこに居るのは・・・？」

少年が雷に気づいたようで白夢に問うように言う。

「敏さんでもないし・・・執事でもない・・・？」

「紹介する。この馬鹿は明坂雷という奴だ、私の近衛執事をしてい  
る」

「誰が馬鹿だ！」

「そうでしたか！えつと雷さん・・・ですか、以後お見知りおきを  
お願いします。僕はテンザカラクバ転坂落馬と申します」

「え、ああ・・・こちらこそ、よろしく」

「近衛執事とはいえ、執事同士。仲良くやっていきましょう」

「え、あ。うん・・・」

雷は頷くと白夢にささやき問いかける。

「えーっと・・・俺はあの人に敬語じゃなくていいのか・・・？」

「ああ、近衛執事は同年代の方でもタメでもいい。どちらか好きな  
ほうを選べ」

「そ、そうか。んで・・・落馬君はどういう人なんだ？」

「落馬は・・・ん、その説明は後だな。今落馬の主が出てきたよう  
だ」

白夢がレジの方に指を指す。

白夢と同年齢らしいきれいな、そして清楚そうな少女がそこに居  
た。

「あら、白夢。いらしてたの？」

その少女は白夢に問う。

「ちょうど今さっきだな。どうだ、景気の方は」

「一応うまくやってるつもり、この前男の人が伝記を大量に持って  
きてくれて、それを店に置いておいたから品揃えはバツチリ」

「うん、まあ・・・頑張れ」

「ええ。・・・そちらのお方は誰ですか？」

「この馬鹿は以下省略」

「省略するな！」

「あら、近衛執事ですか」

「なんで分かるんだ!？」

「どうも初めまして。桜葉伊月サクラハイツキといます。あそこの落馬君は私の執事です」

「それは直接聞いてる。中々真面目そうだなあ……」

「ええ、でもあの人、少しだけ不運なそうで……」

「そ、そうか……」

そこで落馬が脚立にのぼったままこちらを向く。

「伊月さん、そういうことは言わないでくだ……どうわ!」

不自然な体勢でこちらを向いてしまったため、バランスを崩し

ガラガラガツシャーン!

勢いよく脚立ごと倒れこんでしまった。

「痛たたたた……あ、今は違いますよ! たまたまバランスが崩れただけで……」

「落馬、人はそれを不運というのですよ」

「これは俗に言う……ドジ?」

雷は落馬達に聞こえないように白夢にそつと問いかける。

「いやいや……落馬の場合は一味違っぞ。なんていえばいいか……不運だ」

「へ、へえ……」

「そついえば白夢、あなたは用事があるのでは?」

伊月が気づいたように言う。

「うむ、そうであったな。えーつと……」

先ほど落馬が指差した本棚の方で、目的のものを探す。

ちよつと見つかったようで、

「おーあったあった。代金は……500円か、ではここに置いておくぞ。うむ、ではこれで帰る。伊月に落馬君、また後ほどだ」

「はい、また今度です!」

「明日、学校で」

落馬と伊月が手を振りながら白夢を送る。

……落馬が強く手を振りすぎて机の角に手を当てる。

その状況を見ていた雷。

「いやぁ・・・落馬君は真面目だな」

「そうだな。それではすぐ帰るぞ、お前の明日の入学準備でも手伝ってやるう」

「ま、暇だしな」

「そういうことだ」

「そうだな～・・・やはり入学するからにはインパクトのあるものが必要だな」

桜葉書店から帰ってきた白夢と雷は、入学準備をしている。

「よし、そうだ。自己紹介のときは『あれ？なんかこのクラスの女子達美人揃いじゃん！ヒイヤツホオ！こいつぁうっはうはだぜ』と言うがよい」

「入学初日から変態認定されてしまうわ！」

「いいではないか、学園最強の変態としてその名を轟かせるであらう」

「そんな称号持ちたくないやい！」

「まったく、わがままな奴だな・・・」

「どっちがだ！」

二人が言い合っていると、部屋にノックの音がする。

「うむ、入ってこい」

入ってきたのは敏だった。

「お嬢様、御来客が来ております」

「うむ、了解した。入るように促せておいてくれ」

「かしこまりました」

しばらくすると誰かがドアを開ける。

入ってきたのは白夢と同年代くらいの少女で、背は低めで髪が少し短い。

「お遊びにきました、ふえ？なんか知らない人が来ていますっ」  
その少女は雷の姿を見ると少し慌てた様子になる。

「こ、こういうときはどうしたらいいんでしょう。け、警察に通報ですか！？分かりましたです！」

「電嘉、少し落ち着け。こいつ以下省略」  
「省略するなっ！」

「あ、近衛執事さんでしたか！これはすみませんでした！」  
電嘉と呼ばれた少女はぺこりと頭を下げる。

「だからなんで分かるんだよ！」  
「で、どうしたんだ電嘉。遊びに来たのか？」

「そうですねっ！いやぁ大変でしたよー執事さんやSPさんに見つか  
らないように・・・まるで忍者のごとくです！」

「うむ、そうであったか」  
「オイオイオイオイオイ……」

「ふむ、そうだなあ・・・よし、今日はトランプでもしよう。雷  
よ、ちよつと敏を呼んで来てくれ。あいつのことだ、仕事をほとん  
ど終わらして暇してるだろう」

「分かった、すぐ戻ってくる」  
雷は言われるがままに敏を呼びに行く。その間に白夢と電嘉は談  
笑している。

「どうだった、逃げてきたときの感想は」

「それはすごいものですよ！なんていうかすごいのですっ！」  
「ほう、そうか。すごかったのか」

「そうですねっ！」  
程なくすると雷が敏を連れてきた。

「お、これは電嘉お嬢様。ご無沙汰しています」



「あ、いえいえ！こちらもご無沙汰していますです！」  
敏と電嘉が話していると、白夢が切り出す。

「敏、電嘉、そろそろ始めるぞ。まずはババ抜きといこうか」  
「わかった」

「かしこまりました」

「いえっさーなのですー！」

白夢が手際よくカードを配っていく。そして配られたカードの中で被ったカードを捨てていく。

「ふむ・・・悪くはないな」

「うし、なかなかだ！」

「オレの手も悪くはないです」

「全然オツケーです！」

皆、思い思いの言葉を出す。

「では時計回りで、私 雷 敏 電嘉の順番でいくぞ。では雷、私からカードを引いてくれ」

「わかった・・・これだな。次先輩っす」

雷が自分の手札を敏のほうに寄せていく。

「オレの運をなめるんじゃないぞ、雷」

「わかりましたから取ってくださいよ」

「先輩シヨック・・・これだあ！ お、2だな。被ってるから捨てるぞ」

敏が2のカードを捨てる。

「次は電嘉お嬢様です、お取りください」

敏が電嘉のほうに手札を寄せる。

「うゝん、これは悩むのです・・・。とりゃー！」

電嘉が勢い良く敏の手からカードを取る。

「ひゃあ！ジョーカーなのです・・・」

「いや、口に出したら駄目だろ」

雷が冷静に言う。

「ひぁ！そうだったんですか？知らなかったですー」

「オイオイオイ・・・」

「あぁ・・・可愛い・・・」

白夢が電嘉を見ながらそう呟く。

「ん・・・？もう夕方か、そろそろ電嘉の執事がくる頃だな」

「そうみたいですねぇ・・・。ではっ、そろそろ帰らせていただきます。また明日ーなのです」

「また明日だ、しーゆー」

「んじゃ雷、オレ達は仕事に戻るぞ」

敏が雷に指示を出す。

「はい、分かりました！」

## 2・2 幼い時はなんでも初めてだが歳を重ねるとループしていることと気づく

「ところで、電嘉とっていたあの子は…?」

敏に促され仕事に戻った雷は、先程来ていた電嘉のことを聞き出していた。

「電嘉お嬢様は煉園家のご子息でいらっしやる。白夢お嬢様のクラスメイトでもある、まあまたお前も電嘉お嬢様と対面する機会はあるだろう」

「へえ、ありがとございました」

雷は頷きつつ礼を言った。敏はそれを微笑で返し

「これくらいじゃ先輩は務まらないものさ。さ、御夕食の準備だ」

そして執事としての仕事に入っていた、雷もそれに付いて行く。

…夕食の準備、配膳が終了し一日の仕事のほとんどを終えてほっと一息をつく使用人達。

白夢が住んでいる屋敷の方へシフトしている者はあまり居らず、夜中も仕事に仕える者は敏に魅衣奈に使用人長。そして雷くらいである。

もともと、白夢の両親は仕事に追われていてあまりこちらのほうへ帰ることができない。よって使用人の数もそれに比例している。

白夢の屋敷に夜中まで仕事をしている面々は屋敷の下宿部屋で泊り込みの仕事をする。普通の人並の生活を送るには不備のない仕事だ。

雷はこの後、使用人長への挨拶を済ませなければならぬ。

「うわア…ヤバい、緊張してきた…」

いま雷が居る場所は先程話した使用人長の部屋の前である。そこでまるで凍りついたかのように硬直しているのであった。そして、ようやく意を決してコンコンとノックをする。

「君が新入りの近衛執事ね、入っていいわよ」

今の雷には圧迫感極まりない声で入室を許す使用人長。しかも女性という意外な状況に雷は緊張を重ねた。

そして、扉を開けたその時

「のうわあ！」

雷から見るとちょうど真ん前から箒が飛び出してきた。雷はそれを何とかかわす。…だが避けたは避けたものの、次の箒が飛び出してくる。

これを約12回ほど繰り返し、ようやくそれが終わる。

「ぜえ…ぜえ…けほっ…」

雷はその全てを避けきり、ぜえぜえと声を荒げている。

「へえ、なかなかやるわね。雷君…だったかしら？」

使用人長と見られるメイド服を着たけっこう若い女性は笑顔で雷に問う。

「うん、合格よ。さすが白夢嬢様が選ばれた近衛執事ね……」

「ちょ、その前に水…貰え…ますか…」

使用人長はクスクスと笑いながら水を持ってきた。雷はそれを丁寧に受け取って飲んだ。

「あのっ…名前をお伺いしても…いいですか…」

まだ疲れが残っているが、雷は使用人長の名前を尋ねる。使用人長はそれを受け入れて

「私は霧沙、西河霧沙よ。ここ岩崎家の使用人長をしているわ」

霧沙は雷に言われたとおり、自分の名前を名乗った。

「わ、分かりました。ありがとうございます」

雷は少しだけ照れながら名前を名乗ったことに対して礼を言った。



「っふー！今日の仕事は終わりっつ」

自分の部屋に戻り、一息つく。

一日仕事をするこの味わいを知り、それを自分で感心しているようだ。彼自身もそういう感情に浸れることを良いことだと想っているだろう。

しかし、敏のような通常の執事とは違い、近衛執事は重大な仕事がある。それは…

『らあいー。眠れないからちょっと相手してくれ』

…雷は渋々と生返事をして部屋を出て行った。

「うむうむ。すまんこんな夜に」

「いいってよ、別に」

白夢の要望通り、白夢が寝るまで相手をしてやることにした。

雷自身は渋々といった感じだが、白夢は常に笑顔で楽しそうである。

「ふむ、そうだな。この作品の裏話を淡々と語っていくのもまた才ツなものだ」

「序盤からいきなり裏話ネタをするなあああーッ！」

「我儂な奴だ。もっと大らかになりたまえ少年よ」

「この作品倒れるわ！」

白夢がニヤニヤしながらボケをして、それにツッコミを入れる雷。…暇だな。ではこうしようではないか、私がお前の背中に文字を書くからそれを当ててみる」

「ん、背中文字か。…こういう遊び好きだよなお前」

「いいからさっさと背中を向けるファツキン小僧が」

「…怖えよー！」

ベッドの上に二人が座り込み、雷は渋々と白夢の方に背中を向けた。そして白夢は淡々と背中に文字を書いていく。

「…ッ、くすぐるなっ」

「いやいや面白い反応を見るのがこの遊びの醍醐味であり…」

「お前の偏見はいらんわッ！」

ツツ…と順調に背中に文字を書いていき、ようやく終了したように指を雷の背中から放す。

「…長いな」

「うむ、けっこう長いぞ。当ててみるのも大変だろうが」

「…えーっと、あれがあーきてそれがこーきて…」

頭の中で先程白夢が描いた線を再生し、何を書いていたのか考える雷。

10秒…20秒…60秒で考えたがどうやら降参したようで両手を上に差し出した。

「何だ、降参か？」

「ああ、意味がわかんねえ…」

降参した上でもまだ考えている雷。そして白夢の口から答えが漏れる。

「正解は『鬱』だ。どうだ、納得いったか？」

「難しすぎて納得も何もできねえよツツ！」

「ハッハッハ」

雷がツツコミ、そしてそんな様子を見て白夢が笑う。

…そんな繰り返しが続く、白夢が背中に文字を書いている途中で止まってしまったため、違和感がした雷。

「おい、続きを…」

書けよと続けようとしたが、雷の背中にトンツという音がした。

この状況で雷の背後にいるのは白夢のみ。ならばこの音の正体は「……………ツツ…！」

白夢がようやく眠り、必然的に白夢が雷にもたれ掛かった為である。そのことに気づいた雷は顔を赤面させる。

そしてゆっくりとベッドに白夢を寝かせる雷。それに気づかず白

夢はすやすやと寝ている。

そんな白夢を見て、雷がボソツと声を漏らす。

「…寝顔は可愛いんだな…」

思春期男子ありきの感想を呟き、そのまま部屋を出ようとした雷。そこで背後から声がする。

「む…設定6で12万負けただと…ありえない…」

「…どういふ夢を見ているんだよ」

そして、扉を引いて部屋を出た。

…翌朝。

「おはようだ！雷よ！」

雷の部屋で扉を豪快に開けた白夢、そして壁に激突している雷の姿があった。

「それが人を蹴って起こしておいた人間の第一声か…」

「ハツハツハ。まったくもって面白いなあ雷は」

「面白がられる人の身になれよッ！」

「よしよし、まあそう言うな。褒美があるからな」

「褒美い？ なんだよそりゃ？」

白夢が一度部屋を出て、敏を連れてきて戻ってくる。敏の手には黒い服が持たれていた。

「これが、お前の執事服だ」

「こ、これが…俺の…?」

雷は目の前に出されている服に対して感激の声を漏らしている。



「これで、お前も立派な執事になれる。先輩も鼻が高いぜ」  
敏は正式な後輩ができたことで、同じように感激しているようだ。  
「ハツハツハ。雷、嬉しいだろう？」  
「あ、ああ！なんつーか燃えてきたぜえーっ！」  
「フツ…。お嬢様、そろそろ時間なのでは？」  
敏が腕時計を見ながら白夢に言う。  
「あーそうだったな。雷、早めに朝食を終わらせるぞ」  
自分の執事服を早速着ている雷に、白夢は話を切り出した。  
雷は疑問の声を漏らす。  
「へ？ なんでだよ？」  
その疑問に白夢は「ハァー」とため息をつく。  
「今日は、登校日だろう？」  
「あ、そうだった…！」  
「分かったら、早く朝食を食べるぞ。服はその服着ていけ」  
白夢は雷が着ている執事服を指しながら言った。  
「ああ！ つくー！心が躍るぜえーっ！」  
「…なんでこういう時はハイテンションなんだ、こいつは」  
「さあ、見当が付きません」

## 2・2 幼い時はなんでも初めてだが歳を重ねるとループしていることと気づく

お久しぶりです。

この話の振り方からして次回は学園パートだというのが察せられますね。

ここまで一日をgodgodと書き続けていたのは自分でも反省しています。

雷嘉の登場シーンがいろいろと問題ありきでしたがそこは目を離してください。

では、次回で

## 2 - 3 銀河疾風別にさすらわないけどさ

さかのぼる事5分前、雷は意気揚々と執事服を着て学園指定カバンを持って岩崎家を出た。

もちろん白夢も一緒に、学園の制服を着て魅衣奈にポニーテールにしてもらって岩崎家を出る。制服は全体的に青く、スカートは黄色かった。

そして今、二人が居る場所は…

「なんで電車？」

駅のホームである。

「ハッハッハ。私はいつも電車だぞ、もしかしてリムジン登校とか夢見てたんじゃなだらうな？」

「正直に言えばそうなるが、想像と違うよつな…」

「他の生徒はほとんど車だ。私達みたいに電車とかは少ないだらうな」

「んじやなんで電車なんだよ」

素朴な疑問。それを白夢は即答する。

「楽しそうだからだッ！」

「…お前らしいよ」

白夢はハッハッハと笑いながら改札口を出る。雷はその後に続いた。

しばらくすると、電車を降りて徒歩で学園へ向かっていく。

その歩いている中で雷は何かを思い出してそれを白夢に聞き出す。

「なあ、お前の行っている学園ってなんだ？」

その質問に、白夢は平常心で答える。

「零弓学園、聞いたことはあるだらう」

「えええつえええー！？零弓学園！？」

雷は驚いたように声を張り上げる。

「そんなにも驚くことはないであろう」

「驚くも何も零弓学園つつたらどっかの世界でも上位レベルの財閥が建てた学園じゃねえか！資産も半端ないらしいが…」

「うむ、そうだ。ま、そんなにほど驚くことでもないであろうハッハッハ」

「俺が行って大丈夫なのかよ…」

「大丈夫、すぐ慣れる」

「はあ…」

雷は白夢の簡単な回答のため息をついた。白夢はまた笑った。そんなことをしていると

「お、着いたぞ」

白夢が立ち止まり、雷に報告した。零弓学園の校門前である。

「…噂に聞いたが…でかいなあオイ…」

雷は感嘆の息を漏らす。

「ああ、例えるならば 軒島くらいはあるな」

「広ッ！零弓広ッ！」

「ハッハッハ、嘘だ嘘だ」

そのような感じで雷と白夢は話を続けていた。すると、後ろから不意に声が

「お！白夢の姐さんやあないかあ。今日も綺麗やでえ」

振り向いてみると、何やら執事服を着て、学園指定力バンを持った関西弁の少年が立っていた。雷達と同じ年齢だろう。

そして、その少年は白夢のよこできよんとしている雷に気がついた。

「ん？その貧相な顔した奴は何や？」

「貧相は余計だ！」

「ああ、こいつは私の近衛執事の明坂雷だ。今日から零弓に入学す

る」

少年はなるほどといった顔で手をポンとする。

「ほな納得いったでえ、今日からよろしゅうしてや」

少年は笑顔で雷に言う。そしてはっと気づいた顔をして

「自己紹介が遅れてもうた。俺は西の殺し屋、スナイパーガンや  
…」

少年はフフフと声を漏らして格好いい（と思っている）顔で言う。  
しかし、そこで少年の後ろから何かが飛んできて、それが少年の  
後頭部に激突する。

「ぐはああああッッ！」

少年はありきたりな台詞を叫んで前方に吹っ飛ばされる。雷は少  
年に激突したのは何だろうかと少年の方を見ずに確認しようとした。  
すると白夢と同じ制服で、髪は若干長く茶色、背丈が少し小さい  
少女が立っていた。

「つつ…：なんやでえ姐さあん、朝っぱらから本気のツッコミはない  
でえ。勘弁してや〜」

少年が頭を痛そうに抑えながら少女にそう言った。少女は呆れた  
ようにため息をついた。

「ちよつとは黙るってこと…：知らないの？」

「じゃあなんや、西の名探偵の方がよかったんか。姐さんはそっち  
派か！」

すると少女はもう一度少年を蹴る。少年はまた吹っ飛ばぶ。

少女が倒れている少年の方へスタスタと歩いていき、こう呟いた。  
「その名探偵でも解けないような密室怪奇殺人事件でも起こそうか  
…？」

「ひいん、勘弁やあああ！」

「ふざけるのはそれぐらいにしておけ、剣樹。水連には止め金がな  
いことくらいお前なら知っているだろう？」

白夢が二人の間に割って入り込み、平和干渉を行う。白夢になだ  
められて剣樹と呼ばれた少年はとりあえず立ち上がった。

「つつつ…姐さんはほんま手加減ないでえ…」

「もう一度言つとどうなるかな…?」

「いやあん!やめてーなあ!」

「まったく…」

すると水連と呼ばれた少女はきよとんとしてしている雷の存在に気づいた。

「ああ。ごめんね、うちの馬鹿はいつもこんななんだ。君もこいつと同じ近衛執事? だったら白夢の近衛執事かな」

数発か殴られてのびている剣樹を指で指しつつそう言った。

「あ、ああ…明坂雷だ」

「初めましてだね。僕は妖霊水連<sup>ヨウレイスイレン</sup>。そしてこっちは神本剣樹<sup>カミモトケンキ</sup>だよ」

ぐったりとしている剣樹を持ち上げてそう言った。

「今日から霊弓に? 同じクラスみたいだからよろしくね」

そう付け足した後剣樹を降ろした。剣樹はもう一度立ち上がる。

「これからよろしくなあ。俺のことは浪速の剣ちゃんと呼んでくれや」

「…」

「ああん!無視せんといてえん!」

そうして四人で話していると後ろから声。

「あら?どうしましたの、こんなに集まって?」

水連達の時と同じように後ろを見てみると、金髪で瞳が青く日本人ではないと思われるこれまた白夢と同じ制服を着ている少女が居た。

その少し後ろに執事服を着て髪が黒く、瞳の色が水色の少年が立っていた。こちらはどうやら日本人のようだ。

「初めまして…、自分は守人<sup>モリヒトシヤ</sup>駿邪と申します。こちらは…」

駿邪と名乗った少年は主と思われる少女を紹介しようとした。

しかし少女はそれを制し、駿邪は後ろに下がった。

「私はキャリン・ゴイルですよ。その貧相な顔をした殿方は誰

「ですの？」

「ひんっ……」

雷が貧相と言われたことで少しいらついたが、それを白夢が制する。

「ああ、この馬鹿は略」

「略すなああああああああッッ！」

「あああら……活気があるのはよいこと、しかしうるさいのは癩に障りますわね……」

「うわああん……」

キャリンと名乗った少女に被爆され、それを白夢が追撃するといった八方塞の雷。

そんな雷を見て剣樹はニヤニヤしている。

そしてまた、後ろから声が

「ん……？なんだなんだ、今日は井戸端会議でもあるのか。井戸じゃないが……何やら新顔もいるな」

雷が振り向いてみると身長は平均的、髪と眼が茶色な少年が居る。そしてそのすぐ横に少女が立っていた。

「ん……どういうことだろね……」

少女はきょとんとしている。少年は白夢と雷の方を見る。

少年は白夢の方へ目を向けて

「ああ……噂のお前の近衛執事か。ふんふん……」

「うむ。まあ……互いに自己紹介でもしておけ、もちろん美由もだぞ」

先程から雷の周りをトコトコと歩いている少女を呼んだ。

少年は雷の方へ一歩前へ出て

「俺は四季守悠矢だ。今後よろしくな、白夢とは仕事上での知り合いだ」

「私は京谷美由よ。こっちもよろしくね！」

美由と名乗った少女も、雷へ自己紹介をする。

「あ……俺は明坂雷だ。まあ……こっちもよろしく」

雷は少し照れながら自分も自己紹介をした。

悠矢と名乗った少年は雷へ自己紹介を終えた後、白夢の方へ歩いていく。

悠矢は白夢に「耳を貸せ」と一言言い、白夢は耳を寄せる。

「今日は“あいつ”は来てないだろうな……」

周りには聞こえないように小さく言う。白夢は微笑して

「ああ。“今”は、な」

その白夢の答えに対して悠矢は頭を抱える。

「……まあ来ても来なくてもどっちでもいいんだが……」

「ハツハツハ」

雷はその間、美由達にいじられていた。

「ほな、そろそろ時間やでえ。雷は職員室で担任のところへ行つてやあ」

剣樹が腕時計を見ながらそう言った。雷はそれに頷いて白夢と一緒に校門に入る。

「いんやー……中々骨がありそうなやつぢゃなあ……。なあ？悠矢の旦那さん」

雷達が見えなくなると剣樹は悠矢に話しかけた。

「その呼び方をやめろ。前半には同意だがな」

「いつひっひ。気をつけまっすー」

「お二人方、そろそろ私達も行きますわよ。グズグズしないで」

「「あいあいさー」」

「ああ、君が明坂雷ね。はいはい、じゃ教室行こうか」

「ちよっ！流石に進行速度速すぎません!？」

今、雷が居る場所は零弓学園の職員室である。白夢達はすでに教室だ。



雷の目の前に居るのは担任である。

「私は光井沙里君ミンイサリのクラスの担任で」

「脈絡の欠片もない！」

「ああうるさいなあ…。たりいってーの…、じゃ私は先行ってるから」

「ええええええ…」

光井は雷を残して職員室を出て行った。雷は当然ながらきよとんとしている。

「ま、まあ…教室に行けばいいんだよな…。Bクラスでいいんだよな…」

場所を確認しながら職員室を出て行った。

「あー、朝のホームルームとかだるい…」

「先生、口に出ってますよ」

「小鳥のさえずりよ、気にしないで」

光井が居るのは1-B教室。ちなみに雷は扉の向こうに居る。

「今日は転校生が居る。だるっ…」

「どんな人ですかあ、先生」

ある生徒が光井に聞いた。

「ん…例えるならあれね、ウィ・スミス」

(すごっ！俺凄すぎ！)

「ざわ…ざわ…」

「んじゃ、入ってー。だつるっ…」

ハードルをことごとく上げられて翻弄している雷をいざ知らず、

光井は気だるそうに入室させるようにした。もちろん雷は立ち往生。

雷は意を決し、教室の扉を開ける。

先程までざわざわしていた教室は一気に静まり返った。

雷は教卓の前に行き

「明坂雷です。えーっと知ってる方も居ると思いますがこのクラス

の岩崎白夢の近衛執事をしています。あ、ちなみにウィ・スミス主演の映画は好きですよ」(つと…普通にやってみたわけだが…)しかし、心配している雷とは裏腹に、さっきまでは静まり返っていた教室も賑やかになる。

「へえ…」近衛執事つてこのクラスじゃ神本くらいじゃなかったか?」「すごい!」

「あーあー…んじゃ席はあそこね」

光井が窓際の方の空いている席を指差した。その席の前に居るのは「神本」、よろしく頼んだ」

「いえっさーやでえ」

剣樹が手を振りながら返事をした。

「げ…」

雷は咄嗟に口から声を出す。

「口に出てる口に出てる…」

剣樹はげんなりした口調でツッコんだ。

「あー、じゃホームルーム終わり。あとは適当にねー。あーだる…」

光井はだるそうに扉を開けて教室を出て行った。

すぐに生徒は雷の方へと集まる。

「好きな映画は?」「好きな食べ物は?」「好きな小説は?」「好きな動物は?」「血液型は?」

などと次々と質問が寄せられていた。雷はそれになんとか答え

ていく。

その状況の中、誰かが声を出す。

「ハッハッハ、雷は実はゴニョゴニョ…」

「え…マジかよ…?」

「くおらあ!白夢う!」

生徒の誰かにゴニョゴニョと囁いた白夢を雷はすかさず遮る。

「ああ…そろそろ時間だな…。席に戻るつか…」

「てんめええええええええええ!」

## 2 - 4 食券戦争は出遅れれば負ける b V日本兵(前書き)

今回は少しだけ地の文の仕様を変えています。

まあそんなに気にするような変化ではないと思いますのでご安心を。

## 2 - 4 食券戦争は出遅れば負ける by 日本兵

ホームルームが終了し、一限目の授業が始まるうとしていた。あらかじめ屋敷で貰っていた教科書を取り出した。

一限目は歴史、高校最初の授業となる。そのことが嬉しく、心を奮わせていた。

「なんや雷。授業がそんなに楽しいんか？」

一限目が始まるまで時間があるので、剣樹は話し掛けてきた。

「まあ…そんなもんかな」

「はつきりせんな！。まあええわ」

すると剣樹は黒板の方へと身体を向けた。

自分も授業の準備をするようにしたが

「ぐはあつ。教科書忘れたあ！」

不意に、横からの声。白夢である。

教科書がないようでカバンの中を漁っている。

「回答先生に怒られても、知らないよ…」

近くの席に居る水連がそう言った。

「わかつている…。もうグラウンド2週はこりごりだ。いったいどれくらいの距離があるんだと思ってるのだからな」

「基本、のんびり屋なんだけどね。平然とした顔で言われると怖いよ」

「…まあよい。今からマツハでAクラスに行つて借りてくる」

「おいおい…。もう始まつてもおかしくない時間だろ…」

しかしそう言う前に白夢は教室を飛び出していた。

「ま、ああいう奴なんだよ。あいつは」

悠矢が横から解説した。

「ふう。疲れた」

「帰ってくるの早え！」

そしてその後すぐに先生が来た。廊下からコツ、コツ…足音がする。

その足音は次第に大きくなって、扉を開ける音と入れ替わった。先生は教壇の前に立つ。

「うん、皆揃ってるわね。そういえば転校生がいるんだったかな」先生が周りを見回して、雷の姿を発見した。

「私は回答礼。歴史を教えているわ。今後ともよろしくね」簡潔な自己紹介を終えると、授業を始めた。

「ううん。そういえば高等部での授業はこれが始めてかしら？先週は休んでたから」

教科書を開く前に、回答は確認をする。

生徒達は頷いた。

「よし。じゃあ皆に質問するわね」

「質問…？」

生徒達は首をかしげて回答の口元に集中する。

回答はおもむろに口を開き

「なんで歴史の授業をすると思う？」

こう、発言した。と、同時に生徒達は戸惑う。

「そういえばなんでだ？」「ためになる…からかな？」

生徒達は口を開き各々の意見を述べていく。

「せんせえー。正解はなんですかあ？」

少しして、ある生徒がそう言った。

その生徒の発言に回答は少し笑って

「さあ？自分で考えて見なさい。さ、授業をはじめよう」

と、さらっと言った。

生徒達は一瞬都惑うも、そこからは追求することなく、手元の教科書とノートに集中した。

時間は飛んで昼休み。食堂に行こうとしたその時

「あ、教科書返すの忘れてた」

横の方の席から、白夢が思い出したように声を出した。

「馬鹿だ。ここに無慈悲な馬鹿が居る」

「ええい黙れ黙れ。この世界では私が法なのだ」

「あれか、お前はD 7のマリ ルかなんかなのか」

「あれは石碑探しが本当に面倒。まあそんなことより返しに行くのに付き合ってくれ」

「まったく…。この食堂を楽しみにしてたのに」

仕方なさそうに腰を上げて白夢についていく。

ちなみに雷は今朝に1000円ほどもらっており、昼食の代金として使うようだった。

「地の文が少ないだとか後付設定の嵐だとか言うのは「こ愛嬌である」  
おいっ！俺の台詞と地の文入れ替わってるぞ！

「お前は何を言っているんだ」

「あ、白夢！何で今頃持ってきたの!？」

教室から声がする、白夢の位置からは顔は見えるが雷の位置からでは確認できない。

「いやあスマンスマン。ほらあれだ。うっかり八兵衛」

「持ってこなかったから回答先生にどやされたんだよっ！それと  
うっかり八兵衛を汚さないでよっ！」

そこまで聞こえたところで雷はようやく顔を確認することができた。

が、「それ」はあまりにも驚愕的であった。

「……………?」

髪の色は黒、顔立ち、体格、全てがああのキャリン・ゴイルの執事

である守人駿邪に酷似しているのだ。

たった一つ、こちらは瞳の色が黒い。

「…二重人格？」

「第一声が出てくるお前はすごいと思う」

「ん？…ああ。もしかして昨日言ってた白夢の近衛執事？」

少年が気づいたように質問した。

白夢はそれに頷く。同じような台詞がその少年に伝わる。

「正直同じ台詞の使いまわしは酷いと思う」

「白夢、何言ってるの？」

「俺もすっげえ気になったんだが」

「気にすることではない気にすることではない」

「そこまで会話すると、その少年は雷に向かって言う。」

「俺は守人炯太だよと。ちなみに驚いているようだけど、駿邪と

俺は一卵性双生児の双子なんだよと。駿邪は俺の弟」

ああなるほど、と右手を受け皿にして握りこぶしの左手をポンと置く。

「実は他にも双子はいてだな。他に燎閃<sup>リョウセン</sup>、巖鋼<sup>ガンコウ</sup>、翠撃<sup>スイキ</sup>、楓琳<sup>フウリン</sup>となんと五人兄弟だ」

「ちよつと待ってよ。六人兄弟だよと」

「ああスマン。炯太を忘れていたようだ」

「本人を目の前にしてそれはないと思うよ!？」

「まあまあいいではないか。さ、食堂に行こうか」

「なんか上手く丸め込まれた気がするよと…」

白夢と一緒に食堂に向かう中、げんなりと落胆している炯太を雷は哀れに思っていた。

場は食堂。

購買でパンなどを買っている生徒も居れば、食券で食堂の厨房内

で作られたものを買うものも居る。

雷達は後者である。食券を買っていると白夢がいきなり声を上げる。

「おー！しょうやん、今日は購買か」

「俺はしょうやんなんて名前じゃないしょうやんなんて名前じゃない」

「消邪くうん。気づいてるなら返事してもいいじゃん」

白夢が声をかけた方向を見ると、二人の男女が購買でパンを買おうとしていた。

少年の方は腰に何かを差している。こちらからでは人ごみに隠れていてよく見えない。執事服も着ている。

少女の方は制服を着ているようだ。

「なんだなんだ。ごはんですよというやつか」

「うるさい…。ネタも分からない…」

「きつとあれだよ。も やんだよ」

「一向に分からない。いい加減邪魔だ。話しかけるな…」

と言うとパンを買い終えた二人はどこかへ行ってしまった。

歩く速さが速いので、少年が腰に差しているものはまだ確認ができなかった。

「なあ…あの二人は？」

雷は白夢に問いかける。当然だろう。

「あの愛想の悪い奴は闇業消邪。アンゴウシヨウワ横に居た誰かさんとは大違いの明るい奴は月光明だ。ゲツコウアキ消邪はお前や剣樹と同じで近衛執事だ」

「となると明もお嬢様ーってやつか」

「まあそうだな」

「あと、消邪が腰に差してたのはなんだ？」

「あああれか？あれは刀だ」

「か、刀ッ！？」

あまりにも平然に、楽観的に語る白夢に驚きを隠せない。

「なんでも、明は立場上狙われやすい奴だからな。守るために武器



を所持してるらしい」

「銃刀法違反はどつな」

「それを言つては駄目だつて。実際のところ許可を得ているらしい」  
「へ、へえ……」

食券を買い終えた二人は受付へと持つていく。

しかし、そこで揉めている二人が居た。

「いいや。このカツ井は絶対に俺んだ!!」

「ああああん？俺が先におばさんに出したから俺のモンに決まってるだろつが」

「絶対に俺のほうが早かつた！」

「俺のだつつてんだろ」

「りよ、燎閃……。そんなに熱くならないほつが……」

「うるさい！こいつが毎度毎度言うことを聞かないからだ！」

「うざつてえ。とりあえずこれは俺んな」

「待てえつえええ！」

揉めている二人のほかに小柄な金髪の少年も居た。

揉めている二人の方は、一方は黒髪黒瞳、もう一方は赤髪の少年だ。

どうやらカツ井の権利を奪い合っているらしい。

赤髪の少年は肩に棒状の何かをかけて持つていた。

そんな状況に白夢は声をかける。

「やあやあ。今日も元気だな、燎閃、そして銀牙」

「ああん？誰かと思つたら白夢かよ」

「白夢っ！こいつに言つてやれ！」

「は、白夢……。か、関わらないほつがいいよ……」

「心配をするな翠撃……。よし、こつしよう」

白夢は左手の人差し指のみを立たせる。

「ジャンケンでもやつておけ」

「ジャンケンだあ？ちつ……まあ仕方ねエか」

「じゃあ行くぞ！最初はグー……」

燎閃と呼ばれた少年は早々と握り拳を出す。

銀牙もそれにつられて手を出す。

「ジャあンケえン……」

「ポン」

燎閃はチヨキ、銀牙はグーを出していた。

「ま、負けた……」

「ちっ、時間食っちゃまった。最初ッからこうしておけばな」

「くっそ……」

銀牙は悠々とカツ丼をおばさんから受け取り、どこかへ行ってしまった。

燎閃はその場でひざまずき、それを翠撃が慰めていた。

「よし。あれは放っておいて昼食でも頂こう」

「身も蓋もないとはこのことか」

食堂内。

燎閃と銀牙が争っている頃食堂では話が賑わっていた。

そんな中で二人の少女が居た。

「わあー。伊月のご飯はおいしそうですっ！」

一人は先日白夢の屋敷に無断で遊びに来ていた電嘉。

もう一方は本屋を営んでいる伊月だ。

電嘉の手元には十中八九屋敷で作られたと思われる弁当。

伊月には定食だ。

「ええ。でもこれ……少し危険な匂いがあります……」

「危険な匂い……ですか？」

「ええ。なんでもおばさんの話によると……」

『最近汚染米とかで食べ物の安全が心配だからねえ。おばさんたちも気をつけてるんだよ。ま、あたしの美貌には誰にも汚染されないだけだよ。ははっうまいこといったわ』

「だとか……………」

「ひゃあ…それは怖いんです！でも最後の方は蛇足だと思っんです！」

「だからこれを食べるにはそれなりの覚悟が必要…。これが最後の晩餐になるかもしれない…」

「今は昼ですけどねっ！怖いです！」

「では…頂きます」

「い、頂きますなんです…」

二人は要らぬ心配を心に恐る恐る昼食をとっていた。

時はまた飛んで放課後。

そろそろスムーズに時間を進ませたいため無理にでも時間を飛ばそうと必死である。

「またカミングアウトをしている…」

雷の言葉は空しくも誰にも届かなかった。というか聞き入れなかった。

「このまま帰るのもいささかつまらないな。…そうだ、部の方に顔を出してみるか」

「部活う？お前入ってたのか？」

「私は純然たる帰宅部のベテランだ」

「駄目だろそれ」

「キヤッチコピーは『俺には帰る家がある。邪魔するものは一刀両断』だ」

「無駄にカッコいいなあい」

「ちなみに消邪も帰宅部だ」

「一刀両断が実現しそうで怖いなオイ」

「まあこれから行くところは帰宅部ではない。…研究部だ」

『研究部』とでしか聞こえなかつたので雷は何のことだか分かつていない。

「へえ。何の研究部だ？」

「だから…研究部だ」

「だから何の？」

「さつきから言ってるだろう。“研究部”だ」

「…つまり『研究部』という名前の部活？」

「…right。その通り。よく気づいたな」

「誰にも分からないようなネタをするなっ！ で、どういった主旨の部活なんだ？」

当然のように雷は質問する。

白夢は「よくぞ聞いてくれた」と言わんばかりに胸を張って言う。

「色んな研究をする部活だ。個人個人が自由にできる。ちなみにキヤッチコピーは『人間は研究することを欲し、また求めている！ムフフなことやフヒヒなこともまた然り。自分の欲する研究をしたいものは是非研究部へ！現在生徒会から部費削減宣言宣告中！』」

「駄目だその部活…早くなんとかしないと…」

「ちなみにこのキヤッチコピーは私が考えた」

「なんでお前なんだよ！」

「いや何となく…。そんな些細な事は気にせず研究部に向かうぞ」

「…へいへい」

澁々と白夢についていくことにした。

5分ほど歩いて研究部につく。

広大な敷地を持つ零弓でも、部室、部活動の場はけっこう学園本棟に近い。

今、雷と白夢の目の前には研究部の活動の場があった。

「けっこうな大きさのあるドームで、扉の上には『C・B』と書かれていた。」

「別に外に宇宙船があつてその中で地球の重力の100倍のところで戦闘民族が訓練していたり、中には外見からは想像できないようなジャングルがあつたり、カプセルなんかを作つてなんかはしていないぞ」

「誰もそんな心配なんかしていないっ！」

「ハツハツハ。まあいいじゃないか。とりあえず入らないとな、手続きを済ませてくる」

「手続きなんかあるのかよ……」

後ろでツツコんでいる雷を気にせずに、白夢は扉の方へ歩いていって手続きを済ませようとする。

「認証メツセージヨ」

扉の近くのスピーカーから電子音がした。

「すんませーん。三河屋でーす」

白夢が某国民的アニメの端役の台詞を言う。

「アア、スミマセン。今ハンコサインスヨ」

「あー…んじゃサインでいいですー」

「サイン？デハ少シ待ツテイテクダサイ。ペンヲ用意シマス」

「早く済ませてくださいよ、こっちは仕事があるんですから」

「ナ、ナニヨ！！人ノ気モ知ラズニ！！」

「何を言つてるんですか。こっちがお願いしているのに」

「ウルサイウルサイウルサイ！モウ出テ行ッテヨ！」

「…わかりました。では失礼しま…」

「マ、待ッテヨ！…今度チャントシタ届ケ物ニ来ナイト許サナインダカラ…」

「ええ。分かりました」

「サ、最後ニ」

「はい」

「届ケモノハ…。何ナンドスカ…」

「ええつとそれはですねえ…」

「僕の心、です」

「…認証メッセージ確認。許可シマス」

その電子音と同時に、扉は近未来的な開き方をした。アバウトだとかいう質問は受け付けない。

白夢はそこまで終えると汗拭いをして

「さ、中に入るぞ」

「何だっただ…。あのくだりは…」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6962e/>

---

パニック・バトラー

2010年10月10日19時16分発行